

第23回年次大会講演

ニューノーマルと共感資本主義

堂 目 卓 生



はじめに

本日は、日本ナレッジ・マネジメント学会年次大会にお招きいただき、ありがとうございます。新型コロナ・ウィルスの影響で、世界では多くの命が奪われ、日本でも感染の再拡大が懸念される中、今後の命と生活のあり方、それを支える資本主義のあり方についてみなさまと共に考え、語り合う場を与えていただいたことに感謝します。

私は、30年ほど、経済学の歴史、特に18世紀および19世紀のイギリスの経済学を研究してきました。産業革命をきっかけに近代化が進む中、知識人たちが、産業化の現象をどのように受け止め、将来の社会をどのように思い描いたかに関心を持ってきました。本日は、これまでの研究成果にもとづきながら、また、現在私が大学で活動していることも踏まえ、「ニューノーマルと共感資本主義」というテーマで、お話しさせていただきます。

「ニューノーマル」という言葉は、コロナ・ウィルス感染症の拡大による世界的危機

に対して、生活や働き方の新しい規範（ノルム）を考えていこうという意味だと思いますが、実は、新しい規範を求める課題は、以前から指摘されていました。例えば、日本は、人口減少の中、高齢化、少子化、地方の衰退、所得格差の拡大が進むと言われていいます。また、地震や台風など自然災害のことも懸念されています。一方、世界は2100年までに人口があと40億増え、貧困、格差、環境破壊、伝染病、紛争、エネルギー問題などの深刻化が予想されています。2015年の国連総会において、「持続可能な開発目標」(SDGs)が設定されました。そして、今回のコロナ・ウィルス感染症によって、私たちはSDGsの一つ(3:すべての人に健康と福祉を)の重要性を目の当たりにすることになり、「ニューノーマル」を唱えるようになりました。

私は、世界を巨大な豪華客船になぞらえています。優雅に航行してきたかのように見える豪華客船も、いつの頃からか、船底にいくつもの穴が開いてしまいました。そして、それらの穴から水が入ってきています。甲板の上にいる人間が、この状況を知ろうとせず

—あるいは知っているにもかかわらず—何もしなければ、船はいつか沈むでしょう。為すべきことは、上層階の一等船室に逃げ込むことではなく、船底にいて穴を塞ぐことです。船底の穴を塞ぐことができれば、人類は新しい時代を迎えることができると思います。では、どのようにして穴を塞ぎ、さらには、船をどこに向かわせればよいでしょうか、つまり、どのような社会を目指したらよいでしょうか。

実は、近代において、アダム・スミス以来、経済学者の多くは、この問題に取り組んできました。今日は、その中から、スミス、ミル、センの考え方をごく簡単に紹介したいと思います。

アダム・スミスについて

まず、アダム・スミスです。スミスは、2つの書物を世に出しました。1759年の『道徳感情論』と1776年の『国富論』です。『道徳感情論』は倫理学の本であり、『国富論』は経済学の本です。これら2つの著作によってスミスは当時としても大変有名になりました。しかし、後世までスミスの名前を残すことに貢献したのは、やはり『国富論』だと言えます。そして、『国富論』の中で最も有名な言葉は何かと尋ねれば、たいていの人が「見えざる手」と答えるでしょう。そして、「見えざる手」の意味は何かと尋ねれば、「利己心にもとづいた個人の利益追求行動を、社会の繁栄につなげる、市場競争の働きだ」と答えるでしょう。このような解釈によって、スミスは人間を利己的な存在と捉えた経済学者として、また、競争を重視する経済学者と

して評価されてきました。

しかしながら、スミスは、個人の利己心にもとづいた行動が市場を通じて社会の繁栄を無条件に促進すると考えていたわけではありません。共感を原点とした道徳的抑制があっはじめて見えざる手は機能するのだと考えました。共感とは「他人の感情を自分の心の中に写し取り、同じ感情を引き起こそうとする心の働き」のことです。共感にもとづいて、社会の秩序そして繁栄がいかに可能になるかは、スミスのもう一つの著作である『道徳感情論』で論じられました。この書籍では、人間社会における共感のしくみについて述べられています。

そして、この共感の仕組みによる秩序を基盤として、スミスは、フェアな競争を通じて繁栄、つまり物質的豊かさを追求する社会を構想しました。フェアな競争とは、独占、結託、偽装などによって、他の人の参加を意図的に妨げることのない競争です。スミスは、フェアな競争を通じて社会全体の富は最も大きく増大し、その恩恵、つまり雇用が、競争に参加出来なかった人々にも降り注ぐ、そのような社会を目指しました。スミスの構想は、当時の東インド会社やギルドなど、国王や議会から排他的特権を与えられた株式会社や組合が経済を独占する中で、斬新なものだったといえます。しかし、後世の歴史から見れば、スミスが残した課題もあります。それは、(1)競争に参加できない人びとを包摂することと、(2)国や民族、文化や宗教の違いを乗り越えて、道徳を共有することでした。一言でいえば「いかにして「分断」を乗り越え「共感」を広げるか？」という課題です。

私は、この課題がスミス以後の経済学者に引き継がれたと見ています。

ジョン・スチュアート・ミルについて

たとえば、19世紀の哲学者、経済学者のジョン・スチュアート・ミルです。ミルの時代は、世界で初めての万国博覧会が開かれるなど産業革命の成果が本格的に現れる一方、ロンドンのスラム化が深刻になるなど、産業化の影も見え始めた頃でした。イギリス国民は、産業化の波に乗れた人と乗れなかった人に二分され、格差は広がっていきました。このような中で、ミルは、スミスが唱えたフェアな競争を支持しながらも、競争を真の意味でフェアにするために、競争に参加する機会がより多くの人に開かれるべきだと考えました。

ミルは、個人は質の高い快楽を追求すべきだと考えました。「質の高い快楽」とは、様々な快楽を経験した後に個人が積極的に選ぶ快楽のことです。たとえば、飲酒の快楽しか知らない労働者が飲酒を選びつづけるのは、いくら本人がそれで満足しているとしても、質の高い快楽の追求とは言えません。教育を受ける、芸術を鑑賞する、政治に参加するなど、他の快楽を経験した上で自分にとって本当に快いことは何かを考えなくてはなりません。そして、社会は、個人が性格に応じて自由に快楽を追求できるよう、多様性を容認し、あらゆる人に諸活動の機会を開くべきです。生まれや性別によって、追求してよい快楽を限定するのは社会全体の快楽を最大化することにならず、社会の繁栄を妨げるものです。

このような自由の原理に立って、ミルは諸活動の機会均等化を訴えました。たとえば、教育を受ける機会は労働者階級を含めたすべての人に開かれるべきであり、政治に参加する機会も女性を含めてより多くの人に拡大されるべきだと主張しました。また、相続税を用いて同世代における経済的初期条件の格差を縮小しよう、すなわち競争のスタートラインをそろえようとしていました。さらに、社会主義的実験として、労働者が資本を所有する生産協同組合などを奨励しました。より多くの人々が均等な機会のもとで様々な活躍することによって、社会全体は物質的により豊かになり、一人あたりの分け前も増える社会であり、機会の平等と経済成長とが両立する社会であったと言えます。

アマルティア・センについて

1998年にノーベル経済学賞を受賞したインド人の経済学者アマルティア・センは、スミスやミルの思想を受け継ぎつつ、「人間開発」(human development) という視点に立った社会を構想します。センによれば、人生はケータビリティ、つまり選択の幅を拡げるために与えられた時間であり、個人は、自分のケータビリティが最大になるようにエージェントとして行動すべきです。エージェントとはペーシエント（患者）と違い、誰かが助けてくれるのを待つ存在ではなく、自分から積極的に行動する主体です。

社会は、個人——特に自然的・社会的要因によってケータビリティの拡大を阻まれている個人——がエージェントとして行動できるよう、経済的便宜・政治的自由・社会的機

会・透明性の保障・保護の保障を整備すべきです。経済的便宜は物質的な豊かさを、政治的自由は平等な政治参加を、社会的機会は教育や医療などのサービスを受けられる機会を、透明性の保障は情報アクセスの自由を、そして保護の保障は飢饉や災害などの危機に対する準備を意味しています。経済的便宜、つまり物質的な豊かさは人間開発のための手段のひとつでしかないところに注意すべきです。

センの考え方は国連開発計画（UNDP）に採用されました。国連開発計画は、1990年以来、各国が人間開発にどれだけ真剣に取り組んでいるか、つまり、個人がケーパビリティを拡大するための環境をどれだけ整備しているかを示す指数「人間開発指数」（Human Development Index）を作成し、そのランキングを毎年公表しています。ちなみに、2018年の日本の順位は19位でした。

センが構想する社会は、ミルの機会均等をより積極的に推し進め、経済成長よりも分配にウェイトを移した社会とみることができま。何らかの理由で開かれた機会を十分に利用できない立場にいる人——たとえば女性、貧困者、障害者など——に対して、たとえ経済成長につながらなかったとしても、阻害要因を取り除き、他の人と同様に能力の開発ができるようにするという考え方です。経済成長を果たしてから、その成果で人間開発を、ではなく、最も不利な状況にある人の人間開発を社会全体で優先的に推し進めようという考え方です。

このように、スミスから始まり、ミル、センに至る経済学者は、強い人、優れた人が社

会の中心に置いて財とサービスを生産し、生産に貢献できない弱者に分配する方法を考えました。そこには、ヒューマニティにあふれた眼差しがあります。

考え方の逆転

しかし、それでも、この見方には、財とサービスの生産を中心とした見方、それを基準に人間をランク付けする見方があります。私は、今や、この考え方を逆転させる必要があると思います。

静岡市にラルシュカナの家という施設があります。これは世界で150以上ある知的障がい者の施設です。カナの家の特徴は、知的障がい者を自立させたり、社会復帰させたりするための施設ではなく、健常者が一緒に暮らし、健常者の中にある恐れや差別意識などの「心の壁」を取り除くことを目的とした施設だということです。ここでは、障害を持たない人が持つ人を一方的に助けるというのではなく、障害を持たない人が持つ人と共に生活し、彼ら彼女らの心の傷や友情の求めに向き合い、心を開くことによって、自分自身の心の壁をとり払うことにあります。人間は誰もが過去に受けた心の傷や恐れを封じ込めるための壁を心に作って自分を守るとともに、傷や恐れを思い起こさせる他人を嫌い、遠ざけ、排除しようとしています。差別や暴力の根源は、こうした個人の心の壁にあるのです。人類が差別や暴力のない平和な社会に向かって進むためには、世の中から排除された人々に目を向け、接し、共に生き、友情を取り結んでいかななくてはなりません。心の壁を取り払わなくてはならないのは、排除された

人々よりも、むしろ排除する人々なのです。この意味で、知的障害者をはじめとする、世の中から排除されている人たちこそ、人間を解放し、社会の未来に貢献できる「命の輝き」を持っていると考えます。

経済学では、生産の視点から「強い人」や「優れた人」を真ん中に置きますが、ラルシュの考え方では、「弱者」が中心にいます。そして、「強い人」や「優れた人」——正確には生産の視点から「強いとされている人」「優れているとされている人」——が周辺を取り囲み、弱者に出会い、友情を取り結んでいくことによって、自分の心の中にある壁を崩し、自分自身を解放する見方です。「生きるための手段」つまり「物」ではなく「生きることそのもの」、「命」に焦点を当てた見方です。

目指すべき社会

では、目指すべき社会とはどのような社会でしょうか。また私たちは、それに向かって何をすべきでしょうか。私は、目指すべき社会は次の2つの条件を満たすものでなくてはならないと思います。まず、「弱者」と呼ばれる人びとを中心に置き、「強い人」、「優れた人」と呼ばれる人びとが「弱者」と向き合い、共感し、自身の中にある「弱さ」（心の壁）を認め、それから解放される社会です。同時に、自由な企業活動、自由な交換、自由な消費によって、財とサービスが人びとに行き渡る社会です。

これらに加えて、ニューノーマルの時代とは、誰もが弱者になりうる時代であることがわかりました。それまで元気に生活していた

人が、ある日、突然感染者になり、隔離され、場合によっては、家族との面会も許されず、この世を去っていかなくてはなりません。感染者が出た家族や組織も、通常の生活はできなくなります。他方、非常事態宣言が出されたりロックアウトがなされたりすれば、それまで営んできた生業ができなくなり、収入の道が立たれます。実は、普通に生活していた人を「弱者」にする可能性は、コロナ・ウイルス感染症だけでなく、震災や台風等の災害、気候変動、水不足、紛争等、どの社会課題も持っています。ですから、たとえコロナ禍を切り抜けたとしても、誰もが弱者になりうる時代は続くと考えなくてはなりません。コロナ禍で得ることができた最も貴重な体験は、誰もが弱者になりうること、あるいは弱者であることを、人類全体で共有できたことだと言えるかもしれません。

こう考えると、ニューノーマルの時代において目指すべき社会は、「個々人が、今ある自分の特性を困難な状況にある人びとを助けるために自発的に用いることによって自分も助けられる社会」です。自分が弱者になりうること、あるいは弱者であることを認め、そのような弱い自分が今持っている特性（強味と言ってもいいかもしれません）を活かし、困難な状況にある人びとを助け、それによって二重の意味で助けられる。二重の意味というのは、第一に弱者になることの恐れから解放されるという意味であり、第二に弱者になっても打ち捨てられず、誰かが必ず助けに来てくれる、そういう社会で暮らすという意味です。同じ人が「助けられる」（困難の中にいる人）になったり、それを「助ける人」に

なったりする，その中で，助ける人が助けられる人を助けるだけでなく，助けられる人が助ける人を助けるという関係を結んでいく。さらには，その背後で，自由な企業，自由な交換，自由な消費という資本主義が確立している。こんな社会です（図1）。

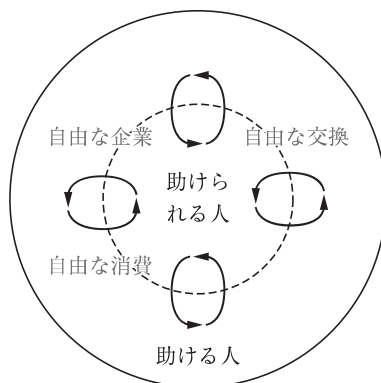
このような社会の実現は夢物語のように思われるかもしれませんが，しかし，実現に向けたムーブメントの兆候は，たとえば，SDGsの「誰一人取り残さない」，大阪・関西万博の「いのち輝く未来社会のデザイン」などに見られます。私は，SDGsを万博のテーマである「いのち輝く未来社会をデザインするプラットフォーム」ととらえています。それは，SDGsの理念である「誰一人取り残さない」ことが私たち一人一人の「いのち」を輝かせることになるからです。様々な困難を抱え「取り残されている人」が助けられるからだけではありません。困難を抱えている人びとをそのままにせず，向き合い，共感し，苦

難を一緒に乗り越えようとすることによって，「取り残さない人」のいのちも輝くからです。私たちは，誰かを取り残したままのいのちを輝かせることはできません。このことに気づき，意識を変え，世界中の人一人一人が小さくてもよいので行動に移していく場，それが万博だと思っています。

私たちが為すべきこと

では，結論として，私たちが為すべきことについて述べます。私たちが為すべきことは，まず，めざすべき社会を実現するための「新たな時代」を各人が真剣に構想することです。そして，次に，新たな時代を見据えながら，日本社会およびグローバル社会において何が課題か，その課題の解決のためには何が必要か，あるいは何ができるか。こうしたことを，考えていかななくてはなりません。最後に，職場や地域など，それぞれが与えられた場において，仲間を作り，行動し，それを

図1 ニューノーマルの時代の共感資本主義



兆候

「誰一人取り残さない」(SDGs 2030)

「いのち輝く未来社会のデザイン」(大阪・関西万博 2025)

言語化、知識化し、社会に広めていくことです。私の場合、大阪大学で3年前に「社会ソリューションイニシアティブ」(SSI) という場が与えられました(図2)。

このような個々の思いや意見、行動の記憶がナレッジとして広がり、重ねあわされてい

くことによって、ソーシャル・ムーブメントを起こすことができると思います。「ナレッジに基づいたムーブメントを引き起こしましょう。」これがナレッジ・マネジメント学会の皆様に対する私のメッセージです。ありがとうございました。

図2 大阪大学 社会ソリューションイニシアティブ (SSI) のこれまでとこれから

